

福山市の土地造成と区画整理の過程について

福山大学 正会員 三輪 利英
福山大学 正会員 近藤 勝直
福山市都市部 正会員 原田 正道

Process of The Reclamation
and Readjustment of Land in Fukuyama City

by Toshihide Miwa,
Katsunao Kondo
and Masamichi Harada

概要

瀬戸内海沿岸地域における都市の発展は、中世から干拓や埋立等の土地造成によるものが多い。本調査では、瀬戸内の一農村が福山城を中心に、干拓により農地の造成を図った過程と、戦後、商工業の中心都市として土地区画整理により都市基盤整備を図った過程を現在の地形から比較し、都市の発展に与える自然的条件を探究するものである。

【キーワード：土地造成、区画整理、都市の発展】

1. はじめに

広島県の東南部、芦田川の下流域に開けた福山市は、瀬戸内海のほぼ中央に位置している。気候は四季を通じて温暖で、いわゆる瀬戸内海気候に属し、降雨量は年間1,000~1,500mmと少なく、昔から度々干ばつの被害を受けてきている。そのため、城下町の建設に当たっては飲料水を、農地の干拓造成に当たっては農業用水を、工業都市の建設に当たっては工業用水を確保するために芦田川の利用を図ってきた。

2. 福山市の土地造成

(1) 城下町の建設

現在の福山市の素地が作られたのは、1619(元和5)年、備後10万石を拝し中国地方初の譜代大名として水野勝成が入国してからである。その当時、現在の福山市街地は芦田川の河口の一寒村にすぎず、城山の前面に海岸線が続いていた。

1620(元和6)年、陸路の要である山陽道に近く、瀬戸内海に面して海路の押さえもきく現在の城山に新城の建設を開始し、1622年に完成している。

城の北方の防御とともに城下町を建設する南側の干潟を氾濫から守るため芦田川を分流し、常興寺山(城山)と両社八幡のある永徳寺山の間を切り抜いて、吉津川を通して。1620年5月の洪水のため芦田川の主流を吉津川に流すのをやめ、これを用水路として利用することにし、城下町の西方に1,100間の堤防を築き主流は南下させている。

干潟上の城下町であったため井戸を掘っても飲料水が得られず、江戸の神田上水について全国でも初期に属する上水道を設置し飲み水を確保している。城の北西、吉津川の蓮池を貯水池として水量の調節機能と、塵埃を沈澱させる浄水機能を持たせ、取水した水は道の真中の溝川を通して城下町に給水している。

道路、水道、港（入江）の整備された城下町は「地子ならびに諸役御免」と税を取らず、藩内各地の「市」から商人を集め、1698（元禄11）年には町人約13,000人、武士11,800人計24,800人の城下町を形成した。町数は30町で、町名にはその出身「市」の府中町、笠岡町、深津町、神島町等の地名がのこっている。

（2）1600年代の土地造成

封建社会の生産基盤は農業であり、福山藩は財政拡充のために藩営事業としてつぎつぎと新田を築成している。福山湾の干潟を築堤により潮留めし、吉津川からの用水路と排水路を整備し、水田として耕地の拡大を図った。また、現在に残っている瀬戸池（1637年－周囲約1.8km）、春日池（1642年－周囲約3.0km）、服部大池（1645年－周囲約2.8km）などの大池もこの時期に築造されている。また、芦田川中流域における治水工事や、用水路の整備も積極的に進め、1698（元禄11）年水野家が5代で改易になったときには、福山藩の石高は13万2,800石に達していた。10万石で入国した水野家はこの79年間に3割以上の財政規模の拡大を図り、特に、福山湾岸地域においては11,800石の増加で、1石当たり10アール（1反）とすれば、約1,200haの水田を造成したと考えられる。

（3）1800年代の土地造成

江戸時代の後半1800年代になって、藩財政の窮乏を立て直すために福山藩は、主に芦田川の河口地域において藩営事業の干拓工事により、約440ha（444町歩）の新田の開発を行なっている。こうした新田は農民に売り払うが、勘下年季といって直ちに本田並の年貢を徴収せず、普通3年間は、見取場として年貢の減免が行なわれ、後に年貢高を決定した。

図-1は、1820年頃の土堤の構造で、馬路が1間幅、高さは平均2間で、大潮をはかってそのときの潮上1間になるようにしている。外側は5寸勾配で羽原石を入れて打石とその上8尺を芝付けとし、内側は、7寸勾配で全て芝付けとしている。築堤作業では、外側の1間幅の内外1間ごとに松の杭入れをし、これに羽原石を入れて根足とし、その中に土と砂を切合わせて棒をもって突き固め、これに船堀りした土を流し込んで固め、土堤心には芦田川から堀揚げた砂をつめている。

（4）1960年代の土地造成

1960年代の高度経済成長期、国の拠点開発構想にそって福山市では、日本鋼管用地920haと箕島沖385haが工業専用の用地として造成された。これらは主に広島県の県営事業として、北部の丘陵地や箕島を削り取った土砂と福山港の航路を浚渫した土砂で、公有水面を埋立造成したものである。

（5）現在の道路地盤高との比較

図2は1/2500の地形図から現在の道路地盤高をプロットして作成したもので、江戸時代の干拓地の標高が推測できる。

尾道・松永港の大潮平均高潮面は標高1.61mで、建設当時の城下町の東と南の端が満潮時の海岸線であったと推定される。その後、干潟を築堤により干拓造成したもので、1600年代の干拓地は標高0mのライン、1800年代の干拓地は0m以下となっている。これらの干拓地は満潮時には海面下となるため、市街化された現在ではポンプによる排水が不可欠となっている。

1960年代に埋立造成された工業用地は標高3m以上である。

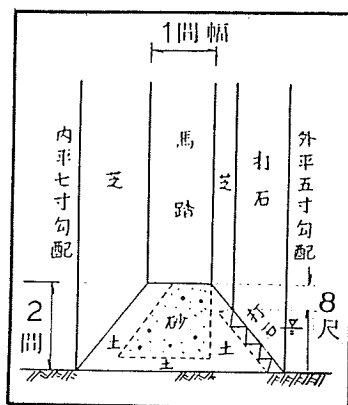


図-1 土堤の構造（注1）

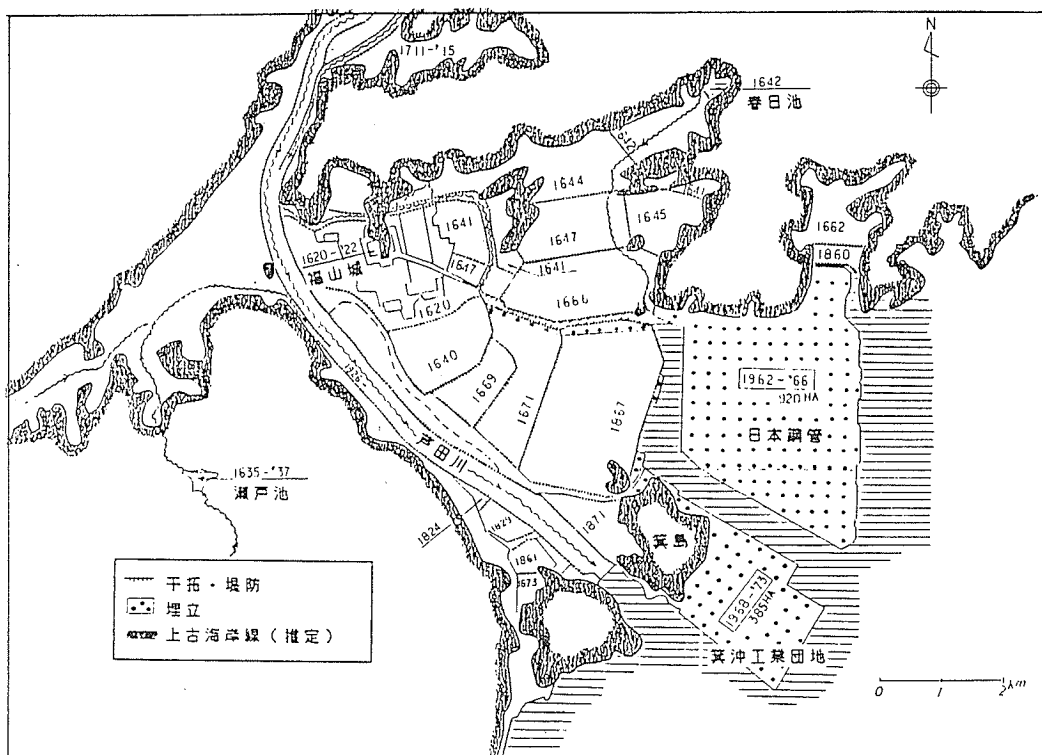


図-2 福山市の土地造成過程 (注2)

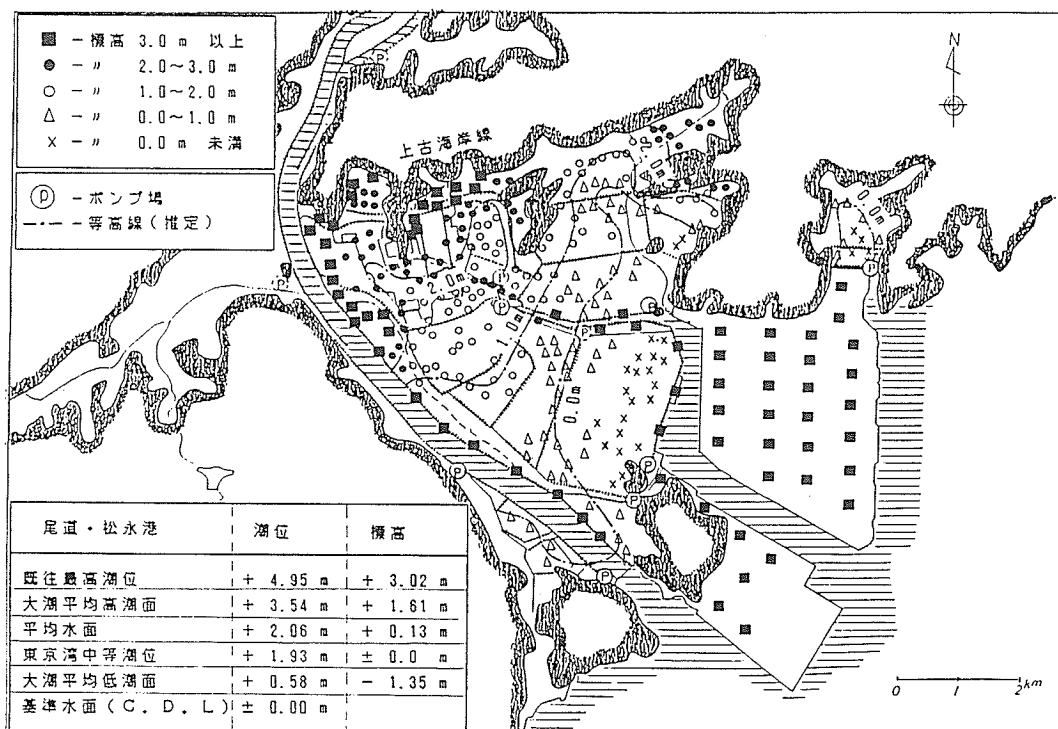


図-3 福山市の現在地盤高と推定等高線

3 城下町の区画整理（現在道路との比較）

（1）城下町の道路構成

城下町の幹線道路は、南北が約 5.7m（2間半）、東西が約 4.5m（2間）で、城下町特有の鉤型や袋小路の道路網となっている。

城下町の面積は約200haで、そのうち宅地として約160ha（48万坪）利用され、残りは道路や水面で、宅地のうち武家屋敷が67%、寺社が17%、町屋敷が1.6%を占めていた。

（2）区画整理の道路構成

近代都市にあっては、道路基盤整備が基本となる。明治維新後、城下町の道路形態のまま市街化のすすんだ福山市は、昭和20年8月の戦災の後、近代的な都市づくりを目指して、旧城下町を中心にその面積の2倍近い約382haの戦災復興土地区画整理事業を実施した。

幹線道路として、福山駅から南に延びる道路は幅員36～55m、東西に走る国道2号は36m、駅から少し離れて北東から南西に延びる道路は25mで整備している。これらの幹線道路は、旧城下町の道路を一部取り込んでいるが、殆んど新たに建設している。

ところが、幅員6～8mの区画街路は、袋小路を極力なくするような形で、大体において城下町の道路構成を拡幅して利用している。この意味では、現在の市街地も基本的には城下町の骨組みをそのまま発展させたものといえる。

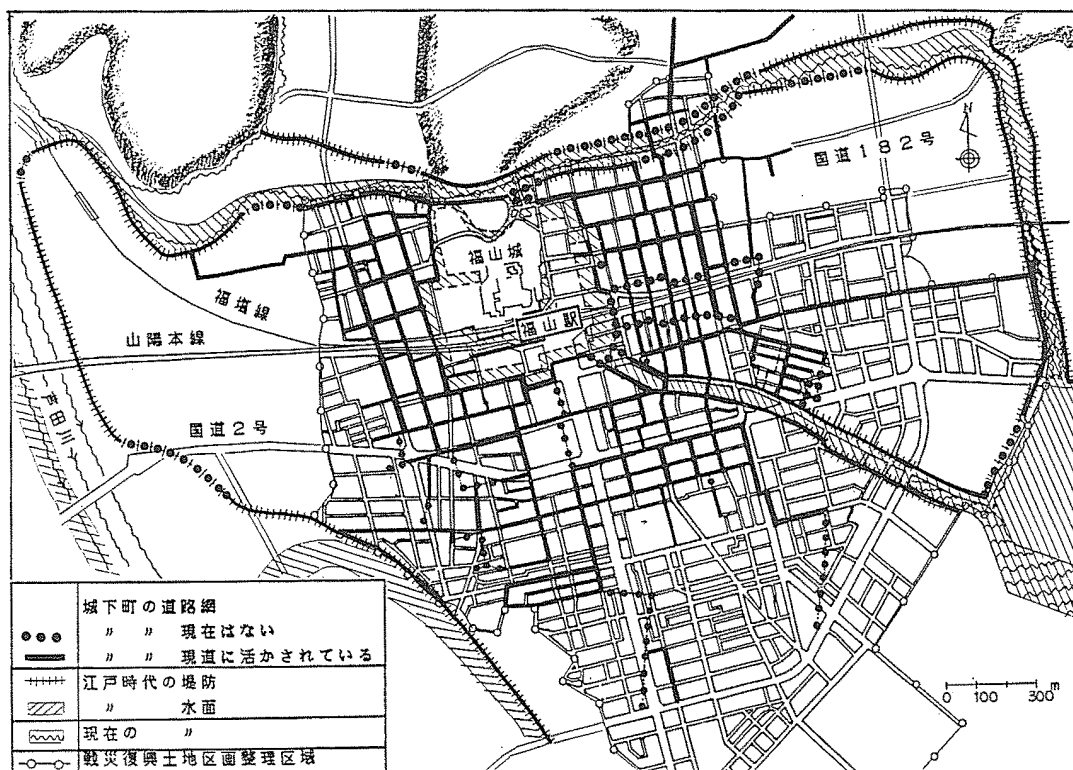


図-4 城下町の建設時と現在の道路網の比較（注3）

4. 重化学工業都市の建設と区画整理

(1) 昭和36年以前の区画整理

戦災復興土地区画整理で中心市街地の近代的な都市づくりをなした福山市は、引き続き東側の港の近辺に公共団体(福山市)施行で、工業用地の区画整理を実施している。

復興区域の東南部では、沖野上地区62ha、川口地区112haの圃場整備を実施し、近郊地帯として農業基盤整備を図り、旧城下町を中心とした田園都市づくりを目指していたと考えられる。

(2) 昭和37～48年の区画整理(石油ショック以前)

高度経済成長期、福山市は一層の発展を図るため、昭和36年に日本鋼管の誘致をきめている。昭和39年工業整備特別地域の指定を受け、粗鋼生産能力年間1,600万tの世界的規模を誇る鉄鋼生産基地の埋立造成を図るとともに、近代的な工業都市としての基盤整備を図るため、城を中心に城下町を建設したように、日本鋼管を中心に、かつて福山藩が水田として干拓造成した土地を、福山市が公共団体施行で工業用地や住宅地として区画整理を実施している。

日本鋼管の背後の丘陵地は、埋立用の土取り跡を含めて、住居専用地域として組合施行や個人施行による区画整理が実施されている。

昭和60年現在福山市では、戦災復興382ha、公共団体1,352ha、組合670ha、個人110haの合計2,514haの区画整理事業が施行済みとなっている。

また、工業用水を確保するため、昭和44年から全長450mの芦田川河口堰の建設を開始し昭和52年に完成しており、日量17万m³の工業用水を得ている。

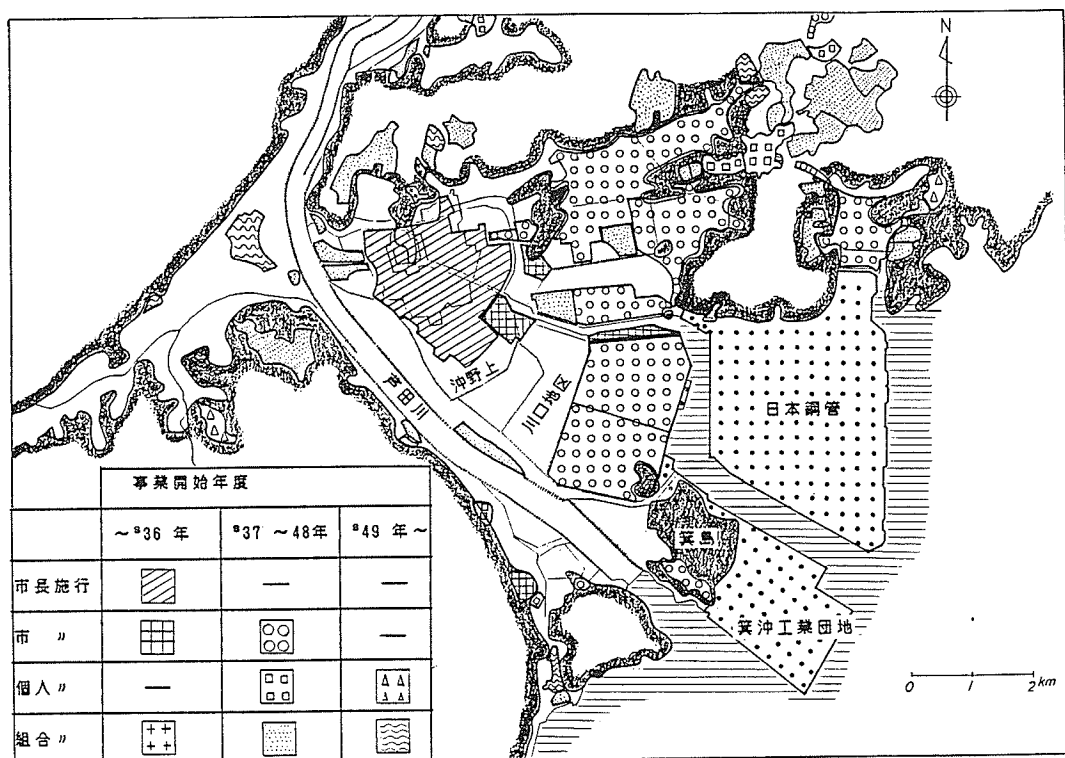


図5-戦後における福山市の区画整理と土地造成

5. 人口と市域面積の推移

1620（元和6）年当時、一寒村に過ぎなかった福山の町は、1698（元禄11）年水野氏改易の頃は30町2.0㎢で人口24,800人となった。18世紀後半から人口の減少をきたし、江戸時代の終わりまで20,000人前後で推移したものと考えられ、1871（明治4）年には18,800人であった。1888（明治21）年、町制施行当時は士卒等の流出があり、面積2.38㎢で人口15,000人に減少している。

山陽鉄道の開通や陸軍歩兵41連隊の誘致等により1916（大正5）年、市制施行当時は面積5.8㎢で人口約30,000人となっている。

その後、戦前戦後を通じて町村合併を繰り返し、市域と人口ともに拡大している。

人口の増加を現在の市域と比較すると、江戸時代は現市域より広い福山藩の人口のため直接は比較できないが、大体100,000人程度である。

国勢調査が始まった1920（大正9）年148,000人、戦後1950（昭和25）年に約200,000人だったものが、日本鋼管の誘致以来急激な増加をみせ、1985（昭和60）年には360,000人となっている。

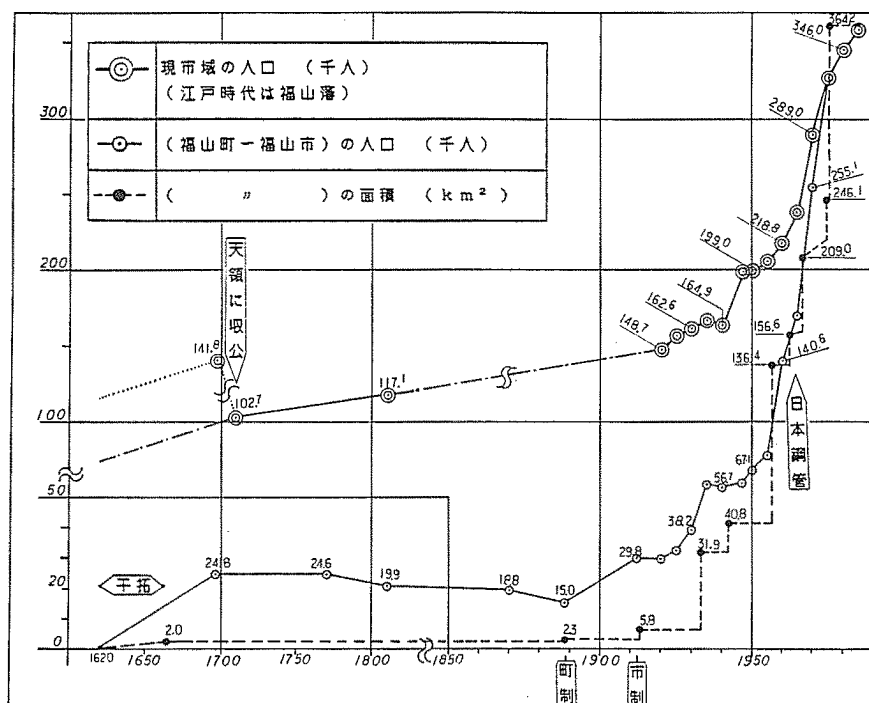


図-6 福山市の市域面積と人口の推移

6. あとがき

福山市の開発と発展の歴史をみると、大きく二つの時期が重要と考えられる。一つは福山城を築き、藩財政拡充のため藩政事業として干拓により農地の拡大を図った時期と、日本鋼管を誘致し工業都市として発展するため、先の干拓地を福山市の公共団体施行で区画整理により都市基盤整備を図った時期である。

すなわち、地域が主役となるべき産業を特定し、その産業の発展のための基盤整備が図られてきたわけである。今後においても、地域の自然的、歴史的条件のもとで、地域のよって立つ産業について明確な方針を持ち、先人の残した事業やその意図したところを十分に組入れて、都市基盤整備を進めていく必要がある。こうした都市基盤整備においては住民の合意形成が必要であり、合意形成のためにも上述のような合理的かつ納得のいく計画理念や計画プロセスが行政サイドに求められるといえよう。また、本稿では言及し得なかったが、こうした計画理念の変遷や土地利用についても今後調査を進めていきたいと考えている。

(注)

- 1 図-1は参考文献(1)の図に加筆した。
- 2 図-2は参考文献(1)、(2)、(5)をもとに作成した。
- 3 図-4は参考文献(3)の図をもとに作成した。

<参考文献>

- (1)「福山市史」全3巻、嵯峨書刊行会、昭和58年復刻版
- (2)「福山水道史」、福山市水道局、昭和43年3月
- (3)原田伴彦外2、「中国・四国の市街古図」、鹿島出版会、昭和54年6月
- (4)蓮見音彦、「地方自治体と市民生活」、東京大学出版会、
- (5)村上正名、「福山の歴史」全2巻、歴史図書社、昭和53年12月
- (6)「広島県史」、地誌、近世1・2